



Title	タンデム学習の会話における日本語学習者のくり返し
Author(s)	王, 嘉成
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2025, 58, p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タンデム学習の会話における 日本語学習者のくり返し

王 嘉 成

キーワード：くり返し／会話連鎖／認識的ステータス／会話分析

1. はじめに

日常会話において、参加者は、会話を進める中で、前の話に出た内容の一部または全部をくり返す（repeat）ことがよく見られる。その都度、聞いた内容をそのまま、あるいは一部を繰り返すことで「社会的行為（social action）」をなすためにさらに、何らかの変化を加えてくり返すのである。このようなくくり返しは母語話者同士の会話だけではなく第二言語学習の場面でもよく観察される。例えば、本稿で取り上げる「タンデム学習」という場面では、日本語学習者が相手の発話の一部をくり返す際に上昇調イントネーションを付け加えて産出し、「確認要求」などという社会的行為を行うことがしばしば観察される。

これまでなされた会話におけるくり返しに関する研究では、くり返しの機能（中田 1992 等）、形状と生起位置（下平 2002 等）、コミュニケーション・ストラテジーの一環としての作用（岡部 2003、楊 2015）、または会話連鎖上の働き（森・前原・大浜 1999、許 2013 等）などを解明するという、数多くの成果が蓄積され、くり返しは会話の中で普遍的な存在であるとわかった。一方、機能に関する研究で取り上げられたくり返しの発話では、いかなる意図のもとに発されたのか、本人ですらわからないケースもあり、発話意図を特定することや発話機能を判定することは難しいという指摘も見られた

(Enfield et al., 2013、楊 2015)。筆者が収集したタンデム学習という教室外の言語学習場面でも、数多くのくり返しが観察されるが、この場面の会話におけるくり返しに関する研究はまだ少ない。

そこで本稿では、タンデム学習場面（3.1 参照）における日本語母語話者と日本語学習者の会話にも頻繁にみられる学習者のくり返しを取り上げ、会話分析（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974）の手法、特に第二言語学習・使用に関する会話分析（Garder & Wagner, 2004）の手法を用いて、くり返しが現れる会話連鎖に着目する。特に、学習者が会話の中でどのようにくり返しを使い、どのような社会的行為を達成するのかを明らかにし、タンデム学習の会話に現れるくり返しの形、およびその連鎖上の特徴を見ていきたい。

2. 先行研究と問題のありか

会話分析の手法を用いてくり返しについてなされた研究は Schegloff (1997) がある。Schegloff は「修復連鎖（repair sequence）」の一環としてのくり返しに着目し、研究を行った。具体的には、「問題源（trouble source）」の次のターンに現れた、問題源となっている内容を一部または全部くり返すことである。さらに、くり返しの定義として、プロソディー、指示詞の変更、時制の変更、話者の変更などに合わせた変換のようなくり返しは認めるが、元の内容に対する解釈のような発話及び大幅な言い換えは除外された。約 1350 の事例を持つデータベースの中で、くり返しはしているが、修復の他者開始ではなかったという境界事例（boundary cases 日本語訳は筆者より）も多数観察された。くり返しには、修復の他者開始の他にも多くの実践を成し遂げることができると指摘された。

同じくくり返しを修復の他者開始として捉える研究を行った Robinson (2013) は、くり返しを産出した会話参加者の、くり返される元の発話内容に対する知識の有無、多少は、くり返しを聞いた聞き手の判断によって決められ、聞き手の行動に影響を及ぼすことを指摘した。くり返しを産出した会

話参加者が、くり返された内容に対する認識的ステータスがK+（知識がある、多い）状態にあると聞き手に判断される場合、そのくり返される内容を修復される必要のある問題源と認識し、修復は無事行われる。逆にK-（知識不足、少ない）状態にあると聞き手が判断する場合は、くり返された内容ではない別の項目について説明や修復を行う可能性があるということが分かった。また、元の内容を一部くり返すことは、時にそれを修復のための問題源提示と理解されず、別の社会的行為を行おうとする合図として理解されることもあると述べられている。

Yokomori 他（2018）は、日本語母語話者の自然会話をデータとし、情報の受け取りを示す方法の一つである、前のターンに出た内容を他者がくり返す（other-repetition）現象に着目し、特に日本語の終助詞「ね」という言語資源が使われる／使われないケースを取り上げて分析を行った。観察したのは「あ+他者くり返し+ね」と「あ+他者くり返し」という、二種類の会話例であった。結果として、「あ+他者くり返し」が第三位置の答えとして産出される場合、「あ」を使い認識状態の変化を示し、その変化をもたらした要因は、くり返し内容で示すことが分かった。一方、「あ+他者くり返し+ね」という助詞「ね」が使われる場合には、そのくり返された内容は発話者にとって新しいあるいは驚くほどの情報ではないことを示していることが窺える。

Greer 他（2009）は、英語学習者のグループ活動会話の録画データを使い、会話参加者が相手が言ったことの一部をくり返して発話する現象に着目して分析を行った。このようなくくり返し発話により、くり返し発話する話者が相手の言うことを理解し、その内容について肯定的態度を示すことができると指摘している。このような社会的行為により、話者がくり返し発話の内容を受容していることがわかり、二人が相互の共通理解を生み出し、英語学習を助け合っていることが見られたという。

以上のような実践に着目する研究以外、Svennevig（2004）は、ノルウェー本土の職員と外国人クライアントのくり返しが現れたやり取りを観察し、下

降調イントネーションで元の内容をくり返せば、「聞いている状態（display of hearing 日本語訳は筆者より）」を相手に示すことができ、また上昇イントネーションで元の内容をくり返しする場合、発話者の内容に対する感情を表出することができる」と述べている。

上述したように、くり返しに関する研究は、分析・考察の視点が異なっている。くり返しに関する捉え方も異なり、統一されていないが、厚い成果が蓄積されてきたが、本稿で着目するタンデム学習場面に見られるくり返し現象にはどのような特徴があり、どのような社会的行為を達成できるのかについてはまだ解明されておらず、考察する余地があると考えられる。また、実際の会話データの中で見られたくり返し発話では、音伸ばしやイントネーションの変化もしばしば観察されるが、このような変化はどのような役割を果たしているのかも検討する価値があると思われる。

以上を踏まえ本稿は以下の3つのリサーチクエスチョンを設定し、タンデム学習における日本語学習者によるくり返しについて分析と考察を行う。

- ① 学習者によるくり返しは連鎖とどのような関係があるか。
- ② くり返しによってどのように認識的ステータスが示されるか。
- ③ ①と②を踏まえ、連鎖と認識的ステータスの間にどのような関係が見られるか

3. データ概要

3.1 タンデム学習について

タンデム学習とは、母語が異なる二人の学習者がペアになり、互いの言語学習を助け合う授業カリキュラム外の活動である。各ペアの学習時間・場所、学習方法、使用する教材、学習計画に関してはすべて学習者自身のニーズに合わせて自由に決めることができる。このような特徴により、実際の会話内容は言語学習にとどまらず、様々な領域に多岐にわたっている。また、本研究はタンデム学習の参加者を「母語話者」と「学習者」と称する。

3.2 データ及び協力者の基本情報

本研究で取り上げる会話データは、日本の某大学にて行われたタンデム学習参加者の録音（一部録画）ファイル及びそれらを文字起こししたトランスクリプトである。また、本稿で取り上げるデータは、日本語－中国語の学習ペアのみに依頼し、収集したものであり、日本語で行われたやりとりを中心に分析を行った。

以下、各ペアの協力者の名前（仮名）及びデータの長さについて表1で示す。

表1 協力者の基本情報

ペア番号	話者仮名	母語	性別	年齢	データ情報
①	しょう	中国語	女性	20代前半	11時間38分4秒 (8回) 録音
	コナミ	日本語	女性	20代前半	
②	そん	中国語	女性	20代後半	1時間40分11秒 (2回) 録音
	エミ	日本語	女性	20代前半	

4. 分析手法

本稿は、録画・録音内容を詳細な文字起こしをしてデータとして用いて分析を進めるという会話分析の手法を用いる。以下 Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が提唱した「会話分析」の基本概念及び Heritage (2012a,b) が提唱した「認識的ステータス」について簡単に説明する。

- ① 隣接ペア（基本連鎖 adjacency pair）：[質問] — [応答]、[依頼] — [受諾]、[情報説明] — [受け入れ] のような強い結びつきを持ち、ペアをなすような行為の連鎖。その中、[質問]、[依頼] というやりとりを開始する発話は、ペアの第1部分 (first pair part: FPP) である。この第1部分に反応する [応答]、[受諾] という発話はペアの第2部分 (second pair part: SPP) である。さらに「質問」という第1部分の後にくる「応答」という第2部分は優先的であり、優先組織 (preference

organization) と呼ばれる。逆に「応答」ではなく他の発話では非優先的である。

- ② 行為連鎖の拡張：先行連鎖とは、基本連鎖の第1部分の前に現れる連鎖のことで、例えば依頼に関する発話を発する前に「ちょっといいですか」のような何かの社会的行為の準備として行われる連鎖である。基本連鎖の第1部分と第2部分の間に挟まれる連鎖は挿入連鎖である。後続連鎖には、基本連鎖を閉じるようなものがあり、更なる連鎖を展開するようなものもある。
- ③ 認識的ステータス (epistemic status) :

Heritage (2012a,b) によれば認識的ステータスとは、ある時点での二人（あるいはそれ以上）の会話参加者のある内容（領域）への相対的なアクセスに関する、本質的、相対的かつ関係的な概念である。その内容（領域）に関する知識が豊富な場合は認識的ステータスが [K+] の状態にあると呼ばれ、逆に知識が少ない場合は [K-] の状態にあると呼ばれる (more knowledgeable [K+] or less knowledgeable [K -])。認識的ステータスは内容（領域）ごとに、または時間の経過とともに変化する傾向がある。また、話の内容に対する理解を示す方法について Sacks (1992) は、前の話に出た内容について他の言葉で言い換えて理解を示すという「理解の立証 (demonstration of understanding)」と、前の話に出た内容をくり返し、「Oh」、「Yes」のような発話により理解を示す方法、「理解の主張 (claim of understanding)」があると指摘した。

5. 学習者のくり返し：手続きの特徴および会話連鎖

本節では、日本語母語話者と日本語学習者の会話の中に現れる学習者のくり返しの手続き上の特徴及び会話連鎖により達成された社会的行為について質的分析を行う。具体的には、4つの事例から見られたくり返し発話が会話連鎖を進め、または中断するという二つの関係性、及びくり返し発話により

表出された認識的ステータス (K+/K-) との関係性について分析する。なお、以下の事例において、編みかけ部分はくり返しの元、矢印 (⇒) は学習者のくり返しを指す。

事例1 【便利】ペア① 2022年11月収録（1回目のタンデム）

しょう：中国語母語話者 学習者 コナミ：日本語母語話者 母語話者
状況説明：((この断片の前に二人は日本と中国の単語帳の使い方について話している。断片中、二人は日中両国の単語帳を比較した。しょうは評価を産出しようとしているが、適切なことばが思い浮かばず、コナミが適切な日本語を提示し、二人は合意を達成した。))

01 しょう：暗記だけで

02 コナミ：あもう：>こやって<>こうやって<°やるですか°

03 しょう：あああ￥はい￥

04 コナミ：日本はもう皆 [(0.8)] こうやってあこれあさん

05 しょう： [あ：:]

06 しょう：[useful (1.4) useful]

07 コナミ：[あこれさん ()] 便利ですね =

⇒08 しょう：=便利あ [便利です

09 コナミ： [hhhhh

⇒10 しょう：本当に便利です

11 コナミ：hhhh

断片の前から 05 行目までの話によって、二人は日中両国の単語帳の様子及び使い方等の知識を交換し、比較することも可能になった。06 行目で日本の単語帳について評価しようとするしょうは、英語で「useful」と評価し、1.4秒のポーズの後再び「useful」と評価している。この1.4秒内にしょうは、適切な日本語を思い出そうとしているが、失敗したのでもう一回英語で評価した。07 行目でコナミがしょうの評価を聞いた後に同調または非同意のような第2部分を産出するのではなく、「便利ですね」としょうが言おうとす

る言葉を推測し、情報提供に見える挿入連鎖を産出した。そして 08 行目で
しようは途切れなく「便利」とくり返し、「あ」と認識状態の K- から K+ へ
の変化を示し、「便利です」とコナミの話を再度くり返しながら、同意を産
出することによりコナミが教えた便利という言葉を受け入れたという情報の
受け入れ、いわゆる挿入連鎖の第 2 部分を産出した。さらに 10 行目でしょ
うは「本当に便利です」と程度を深め、自分なりの評価をもう一度産出し、
便利という言葉を理解したことと示しながら、肯定的意見を固めて本題連鎖
に戻った。しょうの発話に対してコナミは言葉ではなく笑い声で返事をし、
賛成の意思を伝えていると見られる。

事例 2 【りょうし】 2023 年 6 月収録 (3 回目のタンデム)

そん：中国語母語話者 學習者 エミ：日本語母語話者 母語話者

状況説明：((断片の前にエミは最近学んだ中国語教材についてそんに話して
いた。断片の中にエミは突然思い出した数え方「量詞」というこ
とばをそんに聞こうとしているが、その中国語の発音を思い出せ
なく、日本語の音読みでそんに聞いている。))

- 01 エミ：りょ-りょうし？ [わかる] りょ [うし]
 - ⇒02 そん： [うん] [りょ] りょうし？
 - 03 エミ：りょうしうん：
 - ⇒04 そん：りょうしあの (.) 魚 (.) つつ釣る人？ ¥りょうしじゃない？
 - 05 エミ：それは漁 [師]
 - 06 そん：りょうし ¥ ¥そっかアクセント難しい ¥ちょっと調べる
 - 07 エミ：これなんか多分中国語学ぶときしか使わないかもしれない
- 01 行目でエミは自分が思い出せない中国語の「量詞」という言葉につい
てそんに尋ねるが、中国語の発音も忘れていたため、日本語の音読み「りよ
うし」でわかるかどうかを上昇イントネーションでそんに質問をし、基本
連鎖の第 1 部分を産出した。02 行目でそんはわかるかどうかという「Yes」
「No」を問う質問に対して、非優先的な回答、問題の一部をくり返した。だ

がこのくり返しには問題がなく、わからないという認識的ステータスがK-の答えを産出しており、「質問」－「答え」という基本連鎖を完成した。否定的な答えを得たエミは、03行目で独り言のように再度質問のキーワードを提示した。そして「うん」という発話は、エミ自身が適切な中国語の発音を思い出そうとしている兆しだと見られる。

自分の回答が認められなかったそんは04行目で「魚を釣る」と自分のりょうしに対する理解を別の言葉で言い換えて立証し、「じゃない」と上昇イントネーションを使ってエミの反応を促している。05行目でエミは「それは漁師」とそんが理解している内容は間違っていることを明示すると同時に、そんのりょうしに関するK-の認識的ステータスを明示した。このように、K-の認識的ステータスが示されたが、それは連鎖を中断するような存在にはならなかつたことも観察された。

事例3【タイムフライズ】2022年11月収録（1回目のタンデム）

しょう：中国語母語話者 学習者 コナミ：日本語母語話者 母語話者
状況説明：((コナミは日本語をしょうに教えているが、その言葉は理解されない可能性があるため、英語に切り替えようとしている))

- 01 コナミ：えたぶん時間：がたつのが速い(.) 英語でいいですかね
⇒02 しょう：[°時間°]
03 コナミ：[hhh]
04 (3.0)
05 コナミ：あ：？ タイムフライズか
⇒06 しょう：時間がたつのは速い=
07 コナミ：=うんうん [うん
⇒08 しょう： [時間が時間がたつのがはやい
09 コナミ：そうですそうですタイムフライズですね
10 しょう：おおうん

01 行目でコナミはしようと話した内容を日本語で言い出したが、
 しようとこの言い方がわからない可能性があるため、話の最後に「英語で
 いいですかね」ととんの意見を伺い、情報提供という基本連鎖の第1部分
 の産出を予告している。しかし02行目でとんはコナミの予告に反応せず、
 先ほどコナミが教えた日本語の言い方をくり返して学ぼうとしている。約3
 秒の沈黙の後、とんは英語に切り替えることを黙認したと思っているコナ
 ミは05行目で「タイムフライズ」と英語に切り替え、情報提供しているが、
 06行目でとんは基本連鎖の第2部分を産出して反応するのではなく、もう
 一度最初に教われた日本語の言い方を全部くり返して自分の理解の主張を示
 している。そしてコナミも中断された本連鎖から離れ、07行目でとんの
 話に対して肯定的評価を産出した。08行目でとんは再び自分のK+の認識
 状態を示し、挿入連鎖を閉じた。最後に09行目でコナミは本題連鎖に戻り、
 英語の言い方をとんに提示した。とんも10行目で最小限のあいづちに
 より、本題連鎖を閉じた。

事例4【ひつじ】2022年11月収録 (2回目のタンデム)

とん：中国語母語話者 学習者 コナミ：日本語母語話者 母語話者
 状況説明：((断片中二人は中国のゲテモノ料理について話している、特に二
 人はひつじの頭に興味があり、話題を展開した。))

- 01 コナミ：うわひつじの(.) 頭hhhひつじです
- ⇒02 とん：ひつじ
- 03 (1.0)
- 04 コナミ：sheep
- ⇒05 とん：あひつじはsheep
- 06 コナミ：うわ(.) うわ
- 07 とん：えでもそんなものは【中国ではゲテゲテモノ】ではない
- 08 コナミ： [¥そうですよね¥]

ゲテモノ料理の写真を見たコナミは01行目で「うわ」という感嘆詞を使い、驚いた感情を表しながら、「ひつじの頭ひつじです」と断定し、自分の認識的ステータスがK+状態にあることを宣言している。写真の内容はわかるが、言葉自体に関する知識が不足しているしょは02行目で「ひつじ」という前の話に出た言葉をくり返して自分の知識が不足しているK-状態を報告し、本題連鎖を中断した。困っているしょに気づいたコナミは04行目で、sheepと二人の間に共通している言語である英語に言い換え、言葉説明という挿入連鎖を開始しながら、しょにひつじの意味を説明した。05行目でしょはその説明を受け入れて「あひつじは sheep」と自分の認識的ステータスがK+に変化したことを報告して挿入連鎖を完成させた。その後二人はゲテモノ料理の話を進めた。

6. 考察

本節はリサーチ・クエスチョンを再掲し、考察を述べる。

リサーチ・クエスチョン①学習者によるくり返しと連鎖の関係について論じる。連鎖を進める場合には、学習者が話を聞いている状態を示したり、相手の感情と共に鳴を示し、発話を促したりするような社会的行為が達成された。連鎖を中断する場合の多くは、くり返し発話により基本連鎖の中に挿入連鎖を作り、補足説明を要求し、解釈を求めるなどの社会的行為が行われる。時によって学習者のくり返し発話は無視され、挿入連鎖の開始が失敗する場合もある。

リサーチ・クエスチョン②くり返しによってどのように認識的ステータスが示されるかについて論じる。前の話に出た内容をくり返すことにより認識的ステータスがK+状態にあることを表出することができるが、単純な言葉くり返し、イントネーションの変化を加えてくり返すことにより、自分の困惑している状況つまり認識的ステータスがK-状態にあることを相手に示すこともできる。

リサーチ・クエスチョン③くり返し発話による認識的ステータスの表出と会話連鎖の関係性について論じる。結論から言えば両者の間に必然的な関係性はないのではないかと考えている。学習者が、非優先的な第2部分を産出することにより基本連鎖を進めると同時に、自分のK-認識的ステータスを表出することができる。学習者が新しく提供された情報を無視し、続けて前の会話内容について理解しようとし、自分の認識的ステータスがK+に変化したことを報告して新たな会話連鎖に参加することを拒むこともある。つまりくり返し発話によってK-の認識的ステータスを表出しても、K+の認識的ステータスを表出しても、どちらの場合でも連鎖を完成することができる。逆に連鎖を中断することもできる。

また、くり返し発話によって認識的ステータスのK-からK+までの変化を示すような場合は、学習者のその場での認識的ステータスが変化したことを示すものであり、くり返された言葉（知識）が習得した、または知識として定着したとは言い切れない。今後、動画データを収集し、非言語的な要素も分析に入れ、くり返し発話と同時に産出される非言語行動の役割も明らかにしたい。

付録〔トランスクリプトに使用した記号〕

[]	複数の発話が重なっている部分。
=	2つの発話が途切れなく密着している。
()	聞き取り困難な発話。
(0.2)	沈黙・間合いの秒数を示す。(.)は0.2秒以下の沈黙。
：：：	音声の引き伸ばしを示す。コロンの数は音の相対的な長さに対応している。
-	発話が不完全なまま途切れている。
hhh	呼気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。笑いを表すのにも用いられる。
.hhh	吸気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
文(h)字	言葉に挟む吸気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応する。
￥文字￥	笑いながら発話している。
°文字°	弱く発話している。

?	上昇調のイントネーション。
`	やや上昇調のイントネーション。
>文字<	速い口調で発話している。
<文字>	ゆっくりとした口調で発話している。

[参考文献]

- 稻木昭子 (1993)「会話における繰り返し表現」『追手門学院大学文学部紀要』27: 179-191.
- 大浜るい子・永田良太 (2011)「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の比較—「繰り返し」と「言い換え」に着目して—」『教育学研究ジャーナル』8: 41-50
- 荻原稚佳子 (2015)「日中母語話者の繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタイル 質問－応答場面の連鎖を中心にー」『多文化関係学』12: 39-55.
- 下平菜穂 (2002)「インタビュー・プロジェクトにおける聞き返しの指導」『信州大学留学生センター紀要』3: 83-94.
- 高橋淑郎 (2000)「講義におけるくりかえし」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13: 155-168.
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016)『会話分析の基礎』ひつじ書房
- 森恵理香・前原かおる・大浜るい子 (1999)「ターン譲渡の方略としての「繰り返し」と「問い合わせ」」『広島大学日本語教育学科紀要』9: 41-49.
- 西阪仰 (2007)「繰り返して問うことと繰り返して答えること—次の順番における修復開始の一侧面ー」『研究所年報』37: 133-143.
- 中田智子 (1992)「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告』104: 267-302.
- 田中妙子 (1997)「会話における<くりかえし>。テレビ番組を資料としてーー」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9: 47-67.
- 平山紫帆 (2018)「接触場面と母語場面における母語話者の自己発話のくり返しの方法： 日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から」『日本語教育実践研究』6: 28-44.
- 平山紫帆 (2019)「接触場面と母語場面における母語話者のくり返し—日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点からー」『社会言語科学』22-1: 233-248.
- 許挺傑. (2013)「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察：聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態」『筑波応用言語学研究』20: 16-29.
- 許挺傑 (2015)「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖：連鎖の構造的特徴と生

- 起のメカニズム』『筑波応用言語学研究』22: 24-37.
- 楊虹 (2015) 「日中接触場面の中国語会話における<聞き返し>」『鹿児島県立短期大学紀要』66: 1-18.
- Aldrup, M. (2023). Asking the obvious: Other-repeats as requests for reconfirmation. *Contrastive Pragmatics*, 1-33.
- Enfield N. J., Dingemanse M., Baranova J., Blythe J., Brown P., Dirksmeyer T., Drew P., Floyd S., Gipper S., Rosa S., Gisladottir, Hoymann G., Kendrick K., Levinson, S. C., Magyari L., Manrique E., Rossi G., Roque L., Torreira F. (2013) Huh? What? – a first survey in twenty-one languages, In M. Hayashi, G. Raymond, & J. Sidnell (Eds.), *Conversational Repair and Human Understanding* (pp. 343-380). Cambridge: Cambridge University Press.
- Greer, T., Andrade, V., Butterfield, J., & Mischinger, A. (2009). Receipt through repetition. *JALT Journal*, 31 (1), 5.
- Gardner, R. & Wagner, J. (Eds.) (2004). *Second Language Conversations*. London: Continuum.
- Heritage, J. (2007). Intersubjectivity and progressivity in person (and place) reference. In N. J. Enfield & T. Stivers (Eds) *Person Reference in Interaction* (pp. 255-280). Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2012). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1), 1-29.
- Heritage, J. (2012). The Epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1), 30-52.
- Ong, B., Barnes, S., & Buus, N. (2023). A conversation analysis of therapist repeats in open dialogue network meetings. *Family Process*, 00, 1-17.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*. Jefferson, G. (ed.) Oxford:Blackwell.
- Schegloff, E. A. (1997). Practices and actions: Boundary cases of other - initiated repair. *Discourse Processes*, 23. 499-545.
- Svennevig, J. (2004). Other-repetition as display of hearing, understanding and emotional stance. *Discourse Studies*, 6 (4), 489-516.
- Tannen, D. (2007). *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse* (2nd ed., Studies in Interactional Sociolinguistics). Cambridge: Cambridge University Press.
- Yokomori, D., Yasui, E., Hajikano, A. (2018). Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-

interaction, *Journal of Pragmatics*, 123, 167-191.

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Japanese language learners' repetition in
tandem learning conversations

Jiacheng WANG

In everyday conversation, participants mobilize various resources to carry on with a conversation. In particular, sometimes a speaker repeats part or all of what the other speaker has just said, with alterations in intonation or adjust the volume of their voice. Repetitions have been observed in a range of casual and institutional talk, including the tandem learning conversations that comprise the data of the present study. In using repetition, participants express their degree of “epistemic status” (Heritage, 2012), as knowing (K+) or not knowing (K-) about prior words or phrases. Repetition is thus consequential to progressing a conversation or putting it “on hold” to deal with particular issues.

This paper uses recorded data of conversations conducted in Japanese in “tandem learning” activities to analyze how repetitions uttered by learners impact the conversation flow and the role they play in it, employing techniques of conversation analysis. The paper also examines how repetitions express the speaker’s epistemic status and discusses the relationship between the expression of this status and the conversational sequence.